

愛媛大学

「愛媛大学の教育IRについて」

愛媛大学
教育企画室副室長
教授

秦 敬治



1. 教育の質保証における 愛媛大学の教育IR

(1) 愛媛大学教育IRの概要

愛媛大学はPROGテストの試行版を2011年度春に受検しました。周知はポスターを貼っただけにもかかわらず、申し込み学生が300名近くもあったのには驚きました。

今日私がお話するのは、この300名の受検結果に基づく分析ではなく、どうしてこういうところに至ったのかという大学内組織改革について、なぜこういうテストが必要だと思っているのかということに関して、具体的にお話しします。

愛媛大学では教育の質保証をこのところ強化しています。教育企画室では教育IRを担当していますが、教育IRといっても全学レベルでのIRやカリキュラムレベルのIR、授業レベルでのIR、プログラムや取り組みごとのIR、学生集団ごとのIRなど、各レベルや領域ごとのIRがあります。そして全学のIR担当部署としては経営情報分析室がありますが、教育に関するIRは教育企画室が担っています。この教育企画室は3つの部門が設置されています。それは第1部門「教育・学習支援部門」、第2部門「教育調査分析部門」、第3部門「学生能力開発部門」です。

これまでの教育企画室では、教育コーディネーター研修会を通じて、ディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーの策定・改善、カリキュラム・マップの構築、カリキュラム・チェックリストの構築、カリキュラム・アセスメント手法の決定、さらにカリキュラム・アセスメントの評価を導入・支援してきました。

結果的に各学部が掲げているディプロマポリシーに学生が学習成果として到達しているかどうかを判断して

いるのですが、その判断根拠が正しいかどうかが問題となります。そのために各学部・学科の教員と教育企画室の私たちが、それぞれの学部・学科にチェックをかけるという作業をしています。

(2) カリキュラム・アセスメントと勉強会

たとえば卒業時アンケートはカリキュラム・アセスメントを作るのに役に立つため、実施時期、頻度、対象、手法等を決定してもらいました。これを他学部・他学科でも使いたいものがあればどんどん取り入れて実施してもらっています。

さらに、カリキュラム・チェックシート、カリキュラム・アセスメントに基づいて、担当学部・学科の学生のディプロマポリシーに対する到達度をチェックする仕組みも構築しています。

しかし学部・学科の教員だけがこれらをやっている、全学的方向性はなかなか定まりません。そこで私たちは、学長のサポート役となっている経営情報分析室や自己点検評価室の方々と一緒に、IRに関する勉強会を行っています。

2. 教育IRの今後の方向性

(1) ジェネリックスキル修得に関するアンケート

ジェネリックスキル修得に関する改善について具体的に行っているのは、まず既存のアンケートの見直しです。新生入生アンケートをアドミッションポリシーの確認へ、学生生活実態調査は満足度の確認へ、授業評価アンケートはディプロマポリシーの到達度測定へ、卒業予定者アンケートはカリキュラムポリシー・ディプロマポリシーの到達度測定へと変更するという改変を行っています。

次に新規アンケートの充実と手法の見直しについてです。各学年修了時アンケートを行うように改革しているところです。これまでは授業評価アンケートを除くと、到達度が分かるアンケートとしては入学時と卒業時のアンケートしかありませんでした。それを学年修了ごとに行おうとしています。アンケートの手法の見直しとしては、これまで各学部主導アンケートから、全学アンケートに変えることによって統一した設問を用意できるようになりました。そこに各学部が必要とする設問を加えます。そして協力が得られる教育学部でパネル調査を行って追跡していこう、と動きだしました。

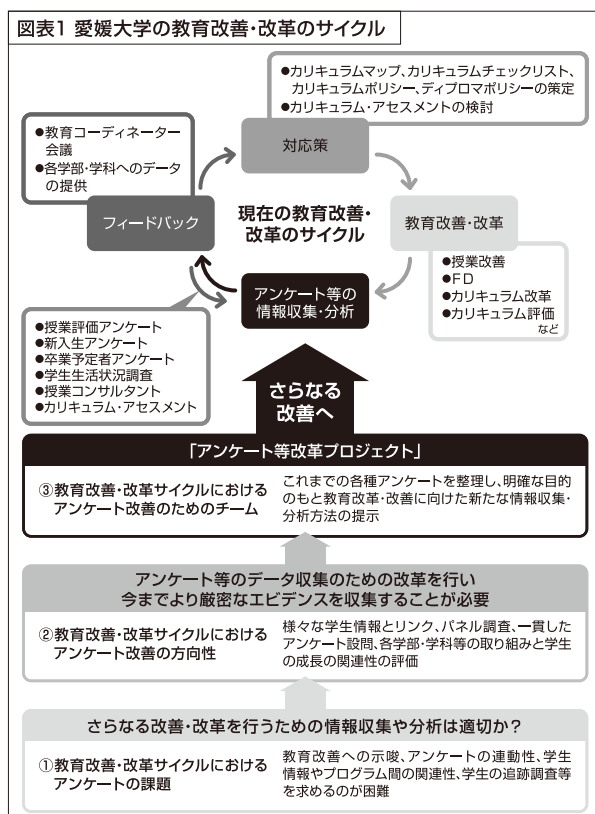
(2) ジェネリックスキルの育成

ジェネリックスキルの修得のための取り組みとして、先ほど教育企画室では教育コーディネーター研修会を行っているとお知らせしましたが、本学には実は800人も教員がいるので、その中の70名に教育コーディネーターという役を4年間担ってもらい、その方々と毎回作業や研修を行っています。そして研修会テーマは、2011年度から2013年度までの3年間、ジェネリックスキルの育成に集中していきます。

特に愛媛大学での学士力育成の取り組みは、正課教育と正課外教育の間に準正課教育という位置づけを設け、これによって学士力を育てようとしています。2011年度は、理論的枠組みとなる体系図を構築中ですが、これを浸透させようとしています。

どういうことかという、卒業に必要な単位が修得できる教育が正課、その他はすべて正課外というのが一般的ですが、正課外の中にも大学が意図的・戦略的に行っているものと、学生が自分たちだけで取り組んでいるものがあります。たとえば、顧問をつけないサークル活動でリーダーシップ力が付きましたといっても、これは大学の力ではありません。アルバイトもそうです。準正課教育は、「単位にならない、または単位にはなるが卒業要件にならない。だけど大学がジェネリックスキルの身に付くことを前提に戦略的に行うプログラム」と位置付けています。

これまで話してきたような全学的に行っている教育改善・改革のサイクルが図表1です。

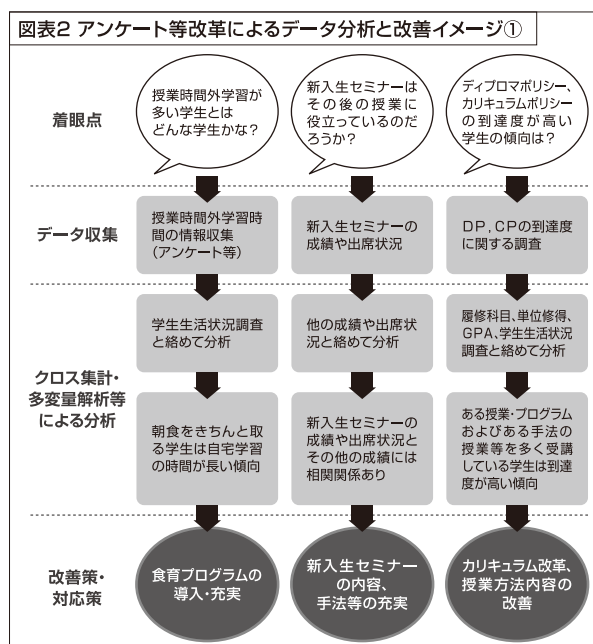


3. PROGテスト導入の理由

私たちは教育の質保証のために、よい結果をもたらす要因を常に調査しています。そしてジェネリックスキルの測定には設問が必要ですが、どのような設問を用意すればいいのかわからない状態でした。そこでPROGテストの試行版を希望者に対し受検させる試みをしました。そこへの経路というのは以下のようなことでした。たとえば、Aという学生が優秀な成績を取ることができ、本人が思うところに就職できた、とします。それはなぜか。Bという学生はプレゼンテーションが非常にうまい、それはなぜだろう。大学に入る前からそういう素養をもっていたのか、それとも大学の正課の活動以外のところで修得したのか、あるいは大学の仕掛けによって成長したのか、まったく分からない状態です。

そこで、図表2のように「授業時間外学習が多い学生とはどんな学生なのか？」という問いを立てました。これは授業時間外活動を確保することで、教育の質保証をしたいからですが、たとえば部活をしている学生としていない学生とで比較したが結果は変わりませんでした。自宅と自宅外学生も変わらない。奨学金をもらっている、もらっていない学生も変わらない。アルバイトをしている、していない学生もどれもほとんど差が出てきません。唯一差が出てきたものは、朝食をちゃんと摂っている学生が授業時間外学習が多いという結果です。愛媛大学は食育の授業を必修化している学部が多いのですが、ではこの食育の授業を強化したらさらに自分たちで勝手に勉強するようになるかもしれない、という仮説が成り立ちます。

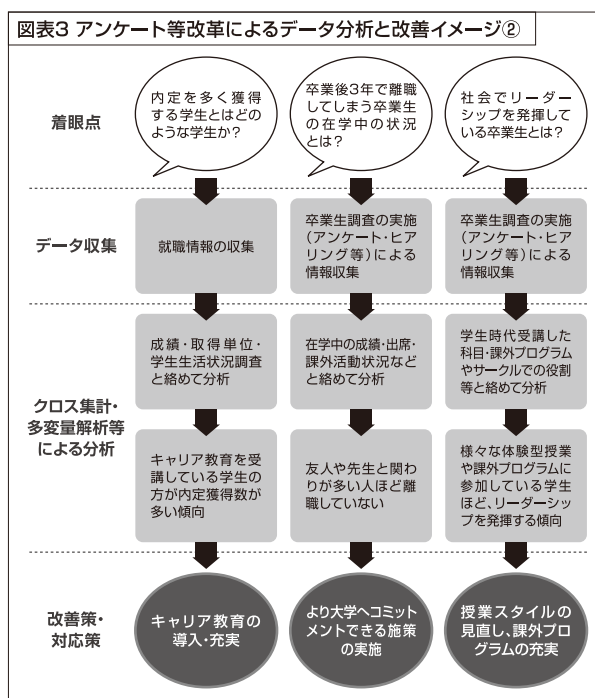
こういったことを調べていきたいのですが、なかなか調べるための手法がありません。



一つは入口のところでちゃんと測定していないし、それから各学年修了時に測定していない。測定するにも、どのような設問を用意すればよいのかわからないのです。

そこで、私は、PROGテストを調べるとその方向性が見えるのではないか、と思いました。ただし、受検しないと設問を見ることはできないので受検しました。結果、私たちの印象は、これで設問の方向性がある程度分かると感じました。また、実際のテスト結果は私たちが思っているような結果でした。つまり、これまで測定のエビデンスがなかったのですが、そのエビデンスができたということです。

図表3のように、「内定を多く獲得する学生はどのような学生か?」ということをパネルで追いかけていくには何らかの指標が必要ですが、大学は成績という指標を持っています。成績以外の能力をみるためには何らかの指標、テストが必要ではないかということで、PROGテストは私たちに役立つ候補になると私は思っています。



3番めは、複数のIRに関する部署があり連携していますが、もっと一体化していく必要があります。

4番めは、学内にこのような取り組みをネガティブに捉える集団もあり、アンケート改革をするだけで反発がありました。PROGテストの試行版を受けたときも、受検のメリット・デメリットは何か、とかなり言われました。そこに対しては、私たちへの信頼を得られるような情報をきちんと伝えていくことが重要だと思っています。

私たちが知りたいのは学生の到達度ですが、特に知りたいのは、学生がどんな能力を持っているかよりも、4年間でどれだけ何が伸びたのか、それは何によって伸びたのか、ということです。それを把握することによってカリキュラム改革につながりますし、伸びた要素はこのプログラムだったと分かればそのプログラムを増やそうと対応できます。または、逆にこのプログラムでは伸びていないようだ、むしろデメリットのようだとなれば、では改革しようとなります。

そのための一つの材料としてPROGテストが活用できると思っています。

(2011年11月4日 東京リクルートGINZA8ビル)

4. 今後の課題

私たちの今後の課題は以下の通りです。

1番めは、学生の適切な能力指標を整えていくこと。特にジェネリックスキルについては整っていないので、これをどうにかしないといけない、というのが大きな課題です。

2番めは、愛媛大学の教育IRは手法としてはまだ甘い状況です。これをきちんと整えていく必要があるということです。